

〔論文〕

連用形名詞の「結果状態解釈」に対する 換喩分析

八木健太郎

- 〈目次〉
1. 考察課題
 2. 「結果状態解釈」の可否に関わる言語事実
 - 2.1 元の動詞の意味特性からの予測不能性
 - 2.2 結果状態解釈の可否に関わる語用論的要因①
 - 2.3 結果状態解釈の可否に関わる語用論的要因②
 3. 換喩分析
 - 3.1 因果関係に基づく換喩の定義と成立要件
 - 3.2 換喩としての「結果状態解釈」
 4. 結論

1. 考察課題

本研究は、単独の動詞連用形、もしくは補語成分や付加語、前項動詞を伴った連用形が転成名詞化した言語形式（以下「連用形名詞」）を考察対象とし、その連用形名詞が元の動詞の表す変化によって生じる結果状態の局面を表す意味用法（以下「結果状態解釈」）について検討する。(1)の各例の下線部が本研究の考察対象となる諸形式である。⁽¹⁾

- | | |
|--------------------------------|---------------|
| (1) a. 「203号室は現在空きだよ」 | [動詞] |
| b. 「このトラックは現在 <u>燃料切れ</u> です」 | [補語 + 動詞] |
| c. 「夕立にあって、私は <u>今びしょ濡れ</u> だ」 | [付加語 + 動詞] |
| d. 「彼は <u>今病み上がり</u> だ」 | [動詞 + (補助)動詞] |

(1a)の「空き」は単純動詞「空く」の連用形が転成名詞化したものであり、元の動詞「空く」が表す変化の結果状態、つまり、〈(203号室が)空いている〉状態を表している。また、(1b)では動詞「切れる」が補語成分「燃料」を伴って転成名詞化しているが、燃料が切れるという変化の結果状態、すなわち、〈(トラックの)燃料が切れている〉状態を表している。同様に(1c)では付加語を伴った動詞が、(1d)では動詞と(補助)動詞の組み合わせが名詞化して、〈びしょびしょに濡れている〉や〈病み上がり〉の結果状態を表すものと解釈される。

この連用形名詞は、古くから先行文献において実に様々な意味用法を持つものとして紹介されてきた。⁽²⁾しかし、(1)のように元の動詞の表す出来事そのものではなく、その出来事や変化の結果として生じた結果状態の局面を表す用法はこれまであまり取り上げられておらず、この結果状態を表す用法がどのように成立し、どのような場合は成立し難くなるのかという問題もこれまで明らかにされてこなかった。(2)から(4)に見られるように、類似あ

るいは同じ語構成でありながら、連用形名詞の「結果状態解釈」として容認度に明らかなコントラストが生じることが、多々観察される。以下〔 〕の数字は日本語母語話者79名を対象に行った容認度の調査結果であり、⁽⁴⁾ #は「結果状態解釈」として容認されにくい例であることを表す。

- (2) a. 市川市内を流れる春木川は水質が全国ワースト1, 国分川はワースト3というひどい汚れです。 [75/79]
 # b. 利根川は汚れです。 [7/79]
- (3) a. 昨年秋の五輪アジア予選では、主力抜きだと攻め手を欠いたなでしこだけど、今日はますますってところでしょう。⁽⁶⁾ [78/79]
 # b. この三日間、親指に刺さっていたとげがやっととれて、今は、とげ抜きだ。 [12/79]
- (4) a. このように、一旦できた分子の集まりがバラバラになってしまうのは、分子の集まりが小さければ0℃より温度が低くても起きるのです。⁽⁷⁾ [77/79]
 # b. この会のメンバーは全員、今集まりだ。 [6/79]

(2a) の実例では、「汚れ」という連用形名詞が〈(春木川がひどく) 汚れている〉といった「結果状態解釈」を示すものとして使用されており、母語話者の判定でも、ほぼ全員が「結果状態解釈」として容認されると判断している。しかし、作例(2b)の「汚れ」の方は、〈(利根川が) 汚れている〉という「結果状態解釈」としてはほとんど容認されない。同様に、実例の(3a)と(4a)は、それぞれ、〈(主力を) 抜いている〉や〈(分子が) 集まっている〉といった「結果状態解釈」として使用されており、高い容認度を示しているが、(3b)と(4b)は〈とげを抜いている〉や〈(メンバーが) 集まっている〉という「結果状態解釈」を示すものとしては容認されることが観察される。

以上のことを踏まえ、本研究では、連用形名詞の「結果状態解釈」の可否にはどのような要因が関与しているのかという問題、またその可否に関わる

要因はなぜ生じるのかという問題を考察することとする。

なお、この連用形名詞は、玉村（1970）や国広（2002）でも指摘されている通り、語彙的な定着度が不確かなものも多く、1つ1つの連用形名詞自体の容認度に関しても「結果状態解釈」としての容認度に関しても、母語話者間で判断の揺れる言語事象であると考えられる。本来、語彙的な定着度や母語話者の容認度の判定は連続的なものであるが、本研究では便宜上（5）のような段階性を設定し、母語話者の判定において半数以上が容認した例を「結果状態解釈」として成立するものと扱うことにする。

（5）本研究における「結果状態解釈」の認定基準

(8) 辞書に「結果状態解釈」としての意味記載あり	例「がら空き」	結果状態解釈可能と認定
辞書に項目はあるが、「結果状態解釈」の意味記載なし	例「集まり」	
辞書に項目記載はないが、母語話者の過半数が容認したもの	例「二軍落ち」	
実例はあるが、母語話者の過半数が容認しなかったもの	例「疲れ」	結果状態解釈不可と認定

2. 「結果状態解釈」の可否に関わる言語事実

この節では、連用形名詞の「結果状態解釈」の可否にどのような要因が関わっているのかという問題を検討する。まず、元の動詞の意味的なアスペクト特性によって自動的に「結果状態解釈」の可否を予測することができないことを確認し、その後、語用論のレベルで2つの要因が関わっていることを明らかにする。

なお、それぞれの連用形名詞、それぞれの意味用法は、その使用頻度に応じて個別の定着度を示すものであり、「結果状態解釈」の可否を一つの基準

で明確に予測することは難しい。本研究は、「結果状態解釈」の可否を離散的に切り分ける規則を明らかにするものではなく、「結果状態解釈」の成立し易さに関わるパラメータを明らかにすることを旨とする。

2.1 元の動詞の意味特性からの予測不能性

連用形名詞の「結果状態解釈」の可否に関してまず確認しておくべきことは、元の動詞のアスペクトの意味特性によって連用形名詞が表す時間的意味が予測可能かどうかということである。⁽⁹⁾ 最も容易に考えられる仮説の一つとして、元の動詞が内的な終了限界を持つ場合には、自動的に連用形名詞も結果状態解釈を持ち得るといえるものが考えられる。しかしながら、(6)に見られる通り、この仮説は明らかに成り立たない。

- (6) # a. 彼は今立ちだ。 [作例] [3/79]
 # b. この壁は現在塗り替えだ。 [作例] [4/79]
 # c. ガソリンの卸値は今、値上がりだ [作例] [15/79]

(6) の各例の連用形名詞「立ち」、「塗り替え」、「値上がり」は全て、内的終了限界を持つ telic な述語であるが、それぞれ〈(彼が) 立っている〉や、〈(壁が) 塗り替えてある〉、〈(卸値が) 値上がりしている〉といった「結果状態解釈」を示すものとしては容認され難い。また、この容認度の低さは(6)の作例に限られたことではなく、同じ連用形名詞である「立ち」、「塗り替え」、「値上がり」は収録語数1億493万語の『現代日本語書き言葉均衡コーパス』での検索においても、「結果状態解釈」としての用例は1例も観察されない。

更に、これとは逆に、一般に結果状態の局面を語彙的に内包しないとされる変化動詞が、連用形名詞に転成した際に「結果状態解釈」として成り立つケースも少なからず観察される。

- (7) # a. その虫は今、死にだ。 [作例] [4/79]
 b. この図になると黒は死に⁽¹⁰⁾です。 [73/79]
- (8) # a. 山の上のほうの木はもう枯れだ。 [作例] [4/79]
 b. 紅葉は小丸山から赤雞山あたりが良い。上はもう葉を落して冬枯⁽¹¹⁾れだ。 [78/79]

(7) と (8) の動詞「死ぬ」と「枯れる」はいずれも、森山 (1988:154) において「s動詞」と分類され、「変化によって生じた状態が意味の中に入っていない」種の動詞と規定される。実際この種の動詞が連用形名詞となったときに「結果状態解釈」を持つことはごく稀であり、通常は (7a) や (8a) のようになりに容認度が低くなることが多い。しかし、(7b) や (8b) のように、同一の連用形名詞でありながら、文脈によっては、「結果状態解釈」として明確に容認される例も観察される。

以上のことから、連用形名詞の「結果状態解釈」の可否は、元の動詞のアスペクト的意味と無関係ではないものの、それによって自動的に決定される性質のものではなく、文脈等の語用論的の要因によって大きく左右されるものであることが分かる。

2.2 結果状態解釈の可否に関わる語用論的要因①

一般的な文脈では「結果状態解釈」として成立し得ないように思われる動詞でも、その連用形名詞を含んだ発話の場面を具体的に設定し、話し手（書き手）と聞き手（読み手）にある種の共通理解があるよう思える場合、一転して「結果状態解釈」が可能になることがある。以下の (9) から (11) の a の各例における「空き」や「集まり」、「死に」といった連用形名詞は、それぞれ〈(缶ジュースが) 空いている〉、〈(学会の参加者が) 集まっている〉、〈(その虫が) 死んでいる〉といった「結果状態解釈」を示すものとしては認められ難く、いずれも母語話者の判定における容認度は低い。しかし、話者（書き手）と聞き手（読み手）を明確に設定し、両者の間にある種の共通認識

が想定されるような文脈を設定した (9b,c) や (10b,c), (11b) の各例では、一転して「結果状態解釈」を示すものとして容認され易くなる。

- (9) # a. この缶ジュースは、いま空きだ。 [14/79]
 b. 【大学のPCルームで、事務職員が、どのPCが使用可能かを尋ねる教員に対して】
 「部屋の一番奥のコンピュータが空きです」 [72/79]
 c. 【歯科院の受付が、次の予約を求める男性患者に対して】
 「9月31日だけ空きですけど、他は全部予約で埋まっていますね」 [78/79]
- (10) # a. 学会の参加者たちは昼には全員集まりだ。 [3/79]
 b. 【羊飼い同士の会話で】
 「羊たちは、さっきまではバラバラだったけど今は一つの集まりだ」 [57/79]
 c. 【科学に関するサイトの説明文として】
 このように、一旦できた分子の集まりがバラバラになってしまうのは、分子の集まりが小さければ0℃より温度が低くても起きるのです。 = (4a) [77/79]
- (11) # a. その虫は今、死にだ。 = (7a) [4/79]
 b. 【囲碁に関するサイトの説明文として】
 「この図になると黒は死にですね」 = (7b) [73/79]

ここで相対的に容認度が高い (9b,c), (10b,c), (11b) の各例に共通することは、「状態Aか状態Bかの2値的な可変性に着目するという共通認識が、話者（書き手）と聞き手（読み手）の間で形成されている」ということであろう。例えば (9b) の話し手である事務職員と聞き手である教員にとっては、〈〈コンピュータが〉空いている〉状態であるのか〈空いていない〉状態であるのか、その2状態（2値）のどちらなのかという問題こそが関心事であり、

その2状態のどちらなのかという点が当該の話題になっているという共通認識も形成されていると考えられる。同様に(9c)では、歯科医と患者の双方にとって〈(9月31日が)空いている〉状態であるか〈(9月31日が)空いていない〉状態なのかが当該の話題であり、(10b)では羊飼い同士の間で〈(羊が)集まっている〉状態なのか〈(羊が)集まっていない〉状態なのか、(10c)では科学関係のHPの管理人とその読者との間で〈(分子が)集まっている〉状態なのか〈集まっていない〉状態なのかが、それぞれ当該の話題になっており、その可変的な2状態のどちらなのかが問題であるという共通認識もあると考えられる。(11b)も同様であり、囲碁に関するHPの管理人とその読者の間では、〈(黒石が)死んでいる〉のか〈(黒石が)死んでいない〉のかということこそが当該の話題であると認識される発話の文脈が整っている。2状態の可変性に着目するという共通理解が話し手と聞き手に形成されている場合に結果状態解釈は容易になることが分かる。

一方、発話状況が特定されず、聞き手(読み手)にとって特に可変的な2状態への注意が喚起されていない(9a)、(10a)、(11a)の3例では、「結果状態解釈」の成立は難しい。(9a)では、「缶ジュース」が話題になっているが、一般に缶ジュースというものが〈空いている〉のか〈空いていない〉のかの2値で捉えられるわけではない。⁽¹²⁾同様に、(10a)の「学会参加者」というものも、通常〈集まっている〉か〈集まっていない〉かの2値で捉えられるわけではないし、(11a)の「虫」に関しても、〈死んでいる〉か〈死んでいない〉かの2値的に捉えるのが常識というわけではないだろう。このように2状態の可変性こそが当該の話題なのだという共通認識がない場合には「結果状態解釈」は成立しないことが分かる。

以上、この節では連用形名詞の「結果状態解釈」の可否に、話し手(書き手)と聞き手(読み手)の間で2状態の可変性が当該の話題であるという共通認識があるかどうかという語用論的要因の関与があることを確認した。

2.3 結果状態解釈の可否に関わる語用論的要因②

連用形名詞の結果状態解釈の可否に関わる語用論的要因のもう一つは、「元の動詞が表す変化が、有標な状態への変化であると認められるかどうか」ということである。通常の（デフォルトの）状態から有標の状態への変化であると認められれば「結果状態解釈」は容認され易くなり、単に有標な状態が終わり元の通常の状態へと戻る変化に過ぎないと受け止められる場合には「結果状態解釈」は難しくなる。

例えば以下の(12)の各例は、全て「～を抜く」という述語から転成した連用形名詞であるが、いずれも「結果状態解釈」を示すものとしては容認され難い。しかし、同様に「～を抜く」という動詞から転成した連用形名詞でありながら、(13)の各例は「結果状態解釈」を示し、母語話者の判定でも相対的にかなり容認度が高くなることが観察される。

- (12) # a. 特別なクリーニングを施しこのシャツは、今シミ抜きだ。
[22/79]
- # b. 半年間の激務を片づけて熱海に向かい、彼は今ガス抜きだ。
[13/79]
- # c. 三日間とれなかったとげをやっととり、右手の薬指は今とげ抜きだ。
[15/79]
- (13) a. アトレティコは8日にコパ・デル・レイ 4回戦ファーストレグ、
アウエーでのアルバセテとの試合を戦い、主力抜きながらも
1-2の敗戦を喫する失態を演じた。⁽¹³⁾ [79/79]
- b. わあー鮭さび抜きだよー！大好きだよー！っていったらそこから
鮭祭り始まったし。⁽¹⁴⁾ [70/79]
- c. 本番前に、コーラを炭酸抜きで飲むのが素早いエネルギー補給に
なり、かつ喉の奥に残らないので都合が良いんですよ。⁽¹⁵⁾ [73/79]

この「結果状態解釈」の可否のコントラストは、(12)の各例の(元の)動詞が表す変化が、いわばデフォルト状態への回帰を表す変化であるのに対して、(13)の各例の変化が、その変化によって生じた特別な(有標な)状態への変化であるという点にある。「シミを抜く」や「ガスを抜く」、「とげを抜く」という変化は、〈シミがある状態〉、〈ガスがたまっている状態〉、〈とげが刺さっている状態〉といった有標な状態から、元の通常の状態への変化を表しており、いわば、特別な状態から通常の状態に戻る変化を表すものと考えられる。一方、(13)の「主力を抜く」や「(わ)さびを抜く」、「(コーラの)炭酸を抜く」という行為は、通常の状態から特別に〈(サッカーチームが)主力を抜いている〉状態、〈(鮭の寿司が)わさびを抜いている〉状態、〈(コーラが)炭酸を抜いている〉状態への変化を表すものと考えられる。

そしてこのようなコントラストは「～抜き」という形式の連用形名詞に限って見られることなく、以下(14)から(16)でも同様のことが観察できる。

- (14) # a. 名古屋は今、梅雨明けだ。 [23/79]
 # b. 彼女は今、休み明けだ。 [27/79]
 c. 彼女は今、夜勤明けだ。 [46/79]
 d. 彼女は今、徹夜明けだ。 [54/79]
- (15) # a. このTシャツは今、汚れ落ちだ。 [3/79]
 # b. 彼女の顔は現在、化粧落ちだ。 [7/79]
 c. あの選手は今、二軍落ちだ。 [79/79]
- (16) # a. おもては今、雨上がりだ。 [18/79]
 b. 彼は今、風呂上がりだ。 [75/79]
 c. 彼は今、病み上がりだ。 [73/79]

(14a,b)の「梅雨明け」、「休み明け」はそれぞれ、特別で有標な状態の終

了を表し、元の通常状態への変化を表すものと考えられるが、(14c)の「夜勤明け」は一般的に、単に通常の状態に戻る変化としてではなく、〈夜勤のために特別に疲れた状態〉といった受けとめられ方をするものと考えられる。同様に、(15a,b)の「汚れ落ち」、「化粧落ち」や(16a)の「雨上がり」はどれも有標な前状態が終わり通常状態に戻る変化として受け止められるものであるが、(15c)の「二軍落ち」、(16b,c)の「風呂上がり」、「病み上がり」はそれぞれ、例えば〈本人にとって不本意な状態〉、〈きちんと着衣ができていない状態〉、〈体力が落ちている状態〉といった、特別な状態への変化と受け止めることができる。

以上のことから、連用形名詞の「結果状態解釈」の可否には、元の動詞が表す変化が、有標な状態への変化であると認め易いかどうかという要因が関わっているものと考えられる。通常の状態から有標な状態への変化の場合、その結果状態は容認され易く、単に有標の状態から通常の状態に戻る変化としてしか受け止められない場合には、「結果状態解釈」は困難になることが確認された。

3. 換喩分析

この節では、連用形名詞の結果状態解釈を換喩によって生じるものとして説明する。3.1において本研究が援用する西村(2002)の定義と、そこから導かれる換喩の成立要件を2件確認し、3.2においてその換喩の成立要件が連用形名詞の「結果状態解釈」の可否に関わる要因と合致することを見る。

3.1 因果関係に基づく換喩の定義と成立要件

換喩は、近年様々な研究において多くの意味拡張や文法事項への関与が明らかになり、それぞれの定義でその重要性が主張されてきた概念である。典型的な例としては、(17)のように空間的な隣接性に基づいて指示の転移が生じているものが挙げられる。

られた用法を示すものであるが、(18b)では「流体の移動の結果身体部分に生じる不快感に焦点が移っている」とされる。また(19)の「流す」に関しても、aが〈水の移動〉の局面を示す用法として使用されているのに対して、bの方はその結果として生じる〈モノの移動〉の局面を示す用法であるとされ、多義発生メカニズムが因果関係(時間的前後関係)に基づく換喩に動機づけられるものであるという説明がなされている。

本研究は(20)のような西村の定義を援用するものであるが、換喩をこのように定義することにより、換喩の成立には(21)のような2つの要件が必要となることが演繹されることになる。

(21) 換喩の成立要件：

- I. 会話者間で適切な「フレーム」が喚起されること
- II. ソースとなる概念からターゲットとなる概念への心的走査
(mental access) に必然性があること

(20)の定義にあるように、換喩は語や構文が内在的に持つ意味によって自動的に成立するものではなく、その発話の参与者間で適切なフレームが共有されてはじめて成立するプロセスと考えることができる。例えば、(22)の「シェイクスピア」は多くの日本人にとって著名な作家であり、作家とその作品を結びつける「フレーム」が読み手や聞き手との間に容易に喚起されるケースであろう。この場合にはごく自然に換喩が成立することが確認される。ところが、これに対して(22b)の「時枝」は、その名が著名な国語学者であることを必ずしも一般の日本語話者に知られているわけではないため、国語学の知識を持たない聞き手(読み手)には作家とその作品を結びつける「フレーム」が喚起されず、換喩が成立しない。更に、(22c)のように無名の筆者となると、「八木」という人名でその著作物を示す換喩はほとんど成立し得ないものとなる。

- (22) a. 「昨日、シェイクスピアを読んだよ」 = (17c) 〈作者〉→〈作品〉
 b. ? 「昨日、時枝を読んだよ」 〈作者〉→〈作品〉
 c. ?? 「昨日、八木を読んだよ」 〈作者〉→〈作品〉

また、換喩が「フレーム内の互いに異なる局面ないし段階を焦点化する現象」であり、焦点の移動によって複数の用法が生じるものであると考えるとすると、そのような焦点の移動には何らかの必然性があるはずであり、必然性のない焦点の移動は起こりえない、という帰結も導き出される。この点に関しては、谷口（2003）が（23）のようなコントラストを挙げた上で、容器から内容物への心的走査（焦点の移動）には必然性があり、その連想の過程が自然なものであるために換喩が容易に成立するが、内容物から容器への心的走査には必然性もないため換喩が成立し難くなることを紹介している。

- (23) a. 一升瓶を飲み干す 〈容器：一升瓶〉→〈内容物：日本酒〉
 b. ? 日本酒は回収してリサイクルすることになっている
 〈内容物：日本酒〉→〈容器：一升瓶〉

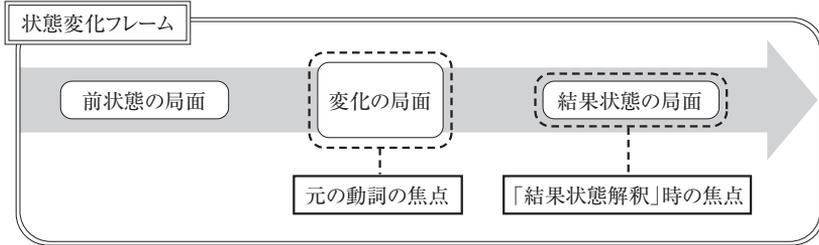
以上、この節では時間的隣接関係に基づく換喩について西村（2002）の定義を援用し、その帰結として換喩成立のための語用論的要件を2点確認した。1点は「会話者間で適切なフレームが喚起されること」であり、もう1点は「ソースとなる概念からターゲットとなる概念への心的走査に必然性があること」であった。

3.2 換喩としての「結果状態解釈」

以上の議論から、本研究では連用形名詞の「結果状態解釈」を換喩によって生じるものと主張する。すなわち、述語として使用される元の変化動詞がデフォルトとして変化の局面を焦点化しているのに対し、その動詞が連用形名詞として使用され、話し手（書き手）と聞き手（読み手）の間に換喩成

立のための要件が整った発話状況においては、時間的隣接関係に基づく換喩が発生して変化の結果状態の局面が焦点化され、「結果状態解釈」が成立するという説明である。このことを図示すると、(24) のようになる。

(24) 連用形名詞の「結果状態解釈」に対するメトニミー分析の概念図



- (25) a. 203号室が今日空いたよ.
 b. 203号室は現在空きだよ. = (1a)

例えば、(25a) のように変化動詞が述語として使われている場合、時間成分「今日」によって取り上げられる動詞「空いた」の局面は、〈空く〉という変化の局面となる。そして、変化動詞が述語として使われる場合、一般的には「～ている」の形式にしなければ結果状態の局面を表すことは難しい。ところが、(25b) のように連用形名詞として使用され、2節で見たような語用論的要因を満たした場合、連用形名詞「空き」は結果状態の局面を示し、「結果状態解釈」が可能となる。

そして、なぜ「結果状態解釈」の成立にそのような語用論的要因が関わるのかという問題に対しても、「結果状態解釈」の成立が換喩による焦点の移動であり、換喩が発生するための2つの要件が関わるためであるといった説明が可能となる。

まず、2.2において、「結果状態解釈」の可否には、状態Aか状態Bかの2値的な可変性に着目するという共通認識があるかどうかという語用論的要因

が関わっていることを確認したが、これは状態変化というフレームが会話者間で喚起されているという共通認識があることと同義であり、状態変化のフレームが活性化されていなければ、変化から結果状態への換喩が発生しないと考えることができる。⁽²⁰⁾

また、2.3では元の動詞が表す変化が、有標な状態への変化であると認め易い場合に、結果状態解釈が容易になることを確認したが、これも、通常の状態(デフォルト)状態は、有標な状態からの変化の結果生じた状態として把握される必要はなく、その意味で有標な状態から通常の状態への回帰を表す変化は換喩のソースとなる意義を持たない。従って、そのような変化がソースとなって結果状態へと焦点の移動を要求する換喩は成立し難く、結果状態解釈が容認され難いものになると説明することができる。

以上、この節では、連用形名詞の「結果状態解釈」を変化の局面から結果状態の局面へと焦点を移動させる換喩であるとする事で、なぜ「結果状態用法」の可否に2つの語用論的要因が関わるのかという問題が説明可能となることを確認したが、この現象を換喩と考えることを後押しする根拠としてはもう1点、この変化の局面から結果状態の局面への換喩現象が、連用形名詞の「結果状態解釈」のみに見られる特殊な現象ではなく、換喩の成立要件を満たす文脈環境が整った場合には、他の言語現象でも見られる一般性のある現象であることが挙げられる。

- (26) a. 先生はご自宅にお戻りになった。
 b. 先生はお疲れだ。
- (27) a. この辺りは曲がった道が多い。
 b. 電器製品は電源が切れた状態で出荷される。
- (28) a. 三日ぶりに救出された。
 b. 嫁に行った娘がまた帰ってきた。

(26) は、「お～になる」という尊敬表現の構文であるが、その構文の構成

を考えた場合、元の動詞「戻る」や「疲れる」の連用形の部分は〈(先生が自宅に) 戻っている〉、〈(先生が) 疲れている〉といった結果状態の局面を表し、本稿の考察対象となった連用形名詞と類似の換喩現象であると考えられる。また、(27)の連体修飾節「曲がった」や「電源が切れた」は、実際に〈(道が) 曲がる〉や〈電源が切れる〉といった変化が生じているわけではなく、これも換喩によって〈曲がっている〉や〈電源が切れている〉という結果状態の局面へと焦点が移動していると考えられる。更に(28)の「救出された」や「帰ってきた」は、それぞれ「三日ぶりに」や「また」といった事態の再現性を含意する副詞を伴っているものの、〈救出される〉や〈帰ってくる〉といった変化の局面が、二度生じたと解釈することはできず、これも換喩によって、〈救出されている(安全な)〉状態や〈帰ってきている(実家にいる)〉状態という結果状態の局面へと焦点が移動していると考えられることができる。⁽²²⁾

以上のように、デフォルトにおいて変化の局面に焦点が当てられる変化動詞が、構文や文脈等の影響下にあって、その変化の結果状態の局面へと焦点を移動させる現象は日本語において少なからず観察できるものであり、連用形名詞においても、語用論的な要件を満たす場合において換喩が発生して結果状態解釈が可能となると考えることは、全く不自然なことではないものと思われる。

4. 結論

本稿では、連用形名詞の「結果状態解釈」を考察対象とし、その解釈の成立の可否にどのような要因が関わっているかという問題を検討した。「結果状態解釈」の可否は、元の動詞のアスペクト的特性から自動的に計算できるものではなく、(i) 発話の参加者間で2状態の可変性が当該の話題になっているという共通理解が得られやすいこと、(ii) 結果状態が元の動詞の変化によって発生するものであると理解され易いこと、という2つの語用論的

要因が関わっていることが明らかになった。

また、この解釈の成立が、人間の一般的認知能力である換喩によって動機づけられるものであると考えることで、なぜ2つの語用論的な要因が関わるのかという問題に対して整合性のある説明を与えると共に、変化の局面から結果状態の局面へと焦点を移す他の言語事象とも統一的な説明ができることを確認した。

〔注〕

- (1) 転成名詞の中でも「焼き鳥」のように補語成分を主要部とする転成名詞と、「先生はお疲れだ」の「お疲れ」のような尊敬表現に関しては、本研究の考察対象から除外する。
- (2) 例えば西尾（1961:70）では、《動作・作用そのもの》（「泳ぎ」・「調べ」・「貸出し」等）、《動作・作用の内容》（「考え」・「教え」・「望み」等）のように、連用形名詞の意味用法を12種に分類している。
- (3) 玉村（1970）では「動作・作用の所産・結果」を表す用法として、「包み」「貯え」「揚げ」等の例を挙げているが、これらは元の動詞が表す変化の結果として生じるモノ（「結果生成物解釈」）であり、本稿の言う「結果状態解釈」とは異なる意味用法に位置づけられる。
- (4) 2013年7月に84名に実施し、有効回答数は79名（男性63名、女性16名）。本稿の全例文に50のダミー項目（20が正用、20が誤用）を加えた。また、全く同一の問題を5問再度提示し、同一問題動詞の回答の一致が4/5を下回った回答者は有効回答から外した。
- (5) 「三番瀬を未来に残そう」（www005.upp.so-net.ne.jp/sanbanze/san171.html）
- (6) 「37℃」（<http://37cacky7313.blog.fc2.com/?m&no=32>）
- (7) 「大阪市立博物館」（www.sci-museum.kit.a.osaka.jp/~nozo/universe/.../ps090.pdf）
- (8) 『大辞林』第3版
- (9) 例えば森山（1988）は、動詞をそれが表す時間的意味に応じて分類し、動詞のタイプと副詞等の共起関係から全体の文のアスペクト的意味を計算する「時定項分析」を提唱している。
- (10) 「囲碁いろいろ」（[http://www.skyblue.ne.jp/~jiro/kakonoigoiroiro\(4gatu\).htm](http://www.skyblue.ne.jp/~jiro/kakonoigoiroiro(4gatu).htm)）

- (11) 「ヤマレコ」 (<http://www.yamareco.com/modules/yamareco/detail-29863.html>)
- (12) もし (9a) が、約 1000 本の缶ジュースが空になっているかどうかを調べる清掃員の間で交わされた発話であると想定した場合、この「空き」という連用形名詞も結果状態解釈を示し得るものとして容認度が上がるものと筆者は予想する。
- (13) asahi.com (www.asahi.com/sports/fb/world/goal/GOC201112100069.html)
- (14) twitter (<http://twitter.com/osanaduma/statuses/61771636025737216>)
- (15) うーたんのブログ (ameblo.jp/yutan-kentan/entry-11112468995.html)
- (16) 山梨 (1988)
- (17) 西村 (2002)
- (18) Croft (1993) 等、換喩を「指示の転移」と定義する立場もあるが、本研究では「厳密に指示が替わるものをメトニミーとする」という立場は採らない。尚、このような「焦点の移動」として換喩を特徴づけるものは、西村 (2002) の他、Radden & Kövecses (1999) による以下の定義が挙げられる。
- “Metonymy is a cognitive process in which one conceptual entity, the vehicle, provides mental access to another conceptual entity, the target, within the same idealized cognitive model.” (Radden & Kövecses 1999:21)
- 「換喩とは、同一の理想認知モデル内で、ある概念 (喩辞) から別の概念 (ターゲット) へと心的走査が生じる認知プロセスのことである」(拙訳)
- (19) 佐藤 (2001) では述語位置にある変化動詞が含意する意味の中から、結果状態の局面がキャンセルされることがあることを紹介している。このことから、述語位置にある変化動詞の意味の焦点は、デフォルト値として変化の局面にあると考えられる。
- (20) 「状態変化フレーム」に関しては、定延 (1993) や定延 (2000) が多くの言語事象を例示して、その実在性を明らかにしている。
- (21) 八木 (2005) ではタ形連体修飾節の結果の焦点化を換喩として分析した。なお、換喩としての説明はとっていないが、金水 (1994) もこの構文を結果の焦点化として取り上げている。
- (22) 八木 (2000) では、副詞句「～ぶりに」によって修飾される動詞が変化の局面ではなく結果状態の局面を焦点化していることを明らかにし、この現象を換喩から説明した。

〔参考文献〕

- 国広哲弥 (2002) 「連用形転成名詞の新用法は異常か」『言語』 vol.31-9 pp.74-77
- 金水敏 (1994) 「連体修飾の『～タ』について」『日本語の名詞修飾表現』くろしお出版 pp.29-65
- 佐藤琢三 (2001) 「他動詞文の結果キャンセルについて」『国語学』 vol.52-1 pp.89-101
- 篠原俊吾 (1994) 「換喩発生の認知プロセス」『実践英文学』第45号, 15-29.
- 定延利之 (1993) 「事態認知モデル構成要素としての状態の必要性」『日本認知科学会第10回大会発表論文集』日本認知科学会 pp.76-77
- 定延利之 (2000) 『認知言語論』大修館書店.
- 菅井三実・八木健太郎 (2003) 「変化動詞における時間的局面的換喩現象」『兵庫教育大学研究紀要』第23巻.
- 谷口一美 (2003) 『認知意味論の新展開 メタファーとメトニミー』研究社
- 玉村文郎 (1970) 「現代語における居体言」『花園大学研究紀要』 vol.1 pp.121-144.
- 玉村禎郎 (1999) 「動詞連用形転成名詞」『光華日本文学』 vol.7 pp.1-14.
- 西尾寅弥 (1961) 「動詞連用形の名詞化に関する一考察」『国語学』 vol.43 pp.60-81
- 西村義樹 (2002) 「換喩と文法現象」『認知言語学 I : 事象構造』 pp.285 - 311
- 森山卓郎 (1988) 『日本語動詞述語文の研究』明治書院
- 八木健太郎 (2000) 「『～ぶり』構文における『緩やかな同一性』の認知言語学的分析」『平成11年度科学研究費研究報告書－生成文法理論による文法の各モジュールにおける最小化に関する総合的研究－』 141-165
- 八木健太郎 (2005) 「タ形連体修飾節の形容詞的用法に対する換喩分析」『日本認知言語学会論文集』 vol.5 pp.315-325
- Croft, William (1993) "The Role of Domains in the interpretation of Metaphors and Metonymies," *Cognitive Linguistics* 4. 337-370.
- Fillmore, Charles (1985) "Frames and the Semantics of Understanding," *Quaderni di Semantica* VI.2, 222-254.
- Lakoff, George & Mark Johnson (1980) *Metaphors We Live By*, Chicago: The University of Chicago Press.
- Lakoff, George (1987) *Women, Fire and Dangerous Things*, Chicago: The University of Chicago Press.
- Langacker, Ronald (1993) "Reference-point constructions" *Cognitive*

Linguistics 4-1,1-38.

Panther, Klaus-Uwe and Thornburg, Linda (2003) "On the nature of conceptual metonymy," *Metonymy and Pragmatic Inferencing*, Amsterdam/Philadelphia:John Benjamins Publishing Company, 1-23.

Radden, Gunter and Zoltan Kövecses (1999) "Towards a Theory of Metonymy," *Metonymy in Language and Thought*, Amsterdam/Philadelphia:John Benjamins Publishing Company, 17-59